終助詞「とも」の通時的考察
― 江戸時代後期から現代まで ―

平木　孝典
倉敷芸術科学大学　インターナショナルセンター

（2012年10月1日　受理）

1　はじめに

現代語の終助詞「とも」は室町時代からの古い終助詞であり、現代においても「勿論」というように判断に迷うことのない強い断定の意を表わし、その用法では男性専用語の傾向があるが、今日の共通語の源流とされる江戸期後期以降の「とも」の使用実態を見ると、女性にも同様に「勿論」とする意として用いられ、話し手よりも上の者には用いづらい待遇性が見られる。明治期になると「とも」の用法に拡張が見られ、「ともよ」などの複合形態や男性専用語の傾向がやや弱められるが、戦後の昭和期から現代に至っては「とも」の使用の衰退が見られる。

本稿は江戸期後期から現代に至る文学作品からの通時的考察により、終助詞「とも」の使用性別及び対人関係による位相性に着目し、その使用の変容過程を明らかにすることを目的とする。

2　「とも」の意味と出現時期

「とも」に関する意味解釈は、先行研究を一瞥するとほぼ同様な見解が見られる。江戸語の終助詞「とも」を取り上げた研究は、中野の「江戸語の終助詞・上接部の種類の整理(二)」(中野. 1998：16－17)があるが、ここでは「とも」が用いられた用例の紹介に止まっている。此島は、「この『とも』も近代語になってできた終助詞で、江戸時代には上方・江戸を通じて現代と全く同様に普通に用いられている」(此島. 1973：401)とし、その意味は「疑いや反対の余地を全く残さない態度、『もちろん』と、うけあう気持ちの表明」(国立国語研究所. 1951：125)という国研からの引用になっている。西田は、「終助詞『とも』は、中世後期には、すでに発生していて、日常会話語として、今日普通に行われているのと同じように用いられた」とし、その意味は「相手のことばをうけて、『もちろん』とうけあう気持ちを表明し、相手に疑いや反対の余地を全く残さない強い態度を示す」(西田. 1967：171－172)とあり、前出の国研の解釈に酷似している。岩井は、「終助詞『とも』は江戸時代に始まる。特に後期江戸語に多く現れる」とし、その意味は「相手の話す事に対して、もちろんの事と肯定する意味を表わす」(岩井. 1974:334)と述べ、湯沢は、「『とも』は常に文の末に来る感動助詞であって、相手の話を積極的に受け入れる場合に用いる」

（湯沢. 1954：677）と記している。

これらの研究によると、「とも」は室町辺りに出現し、江戸期後期になり多用されたようであり、長い年月を経ても現代での聞き手に返答する場合の「勿論」という肯定的な断定の意を表明するものとして用いられたようである。

次に「とも」の出現時期を見ると、先行研究ではその出現を室町期とし、多用時期を江戸期後期とする説を見たが、室町期では「狂言」に数多く散見できる。

「何がさてとくとお供致しましようとも」（狂言集. 1968：219）

この「とも」は、「お供致しましよう」という話し手の意志を強く断定する意を表わす、用言の未然形に下接した終助詞である。このような用言に付く「とも」は、既に『万葉集』にも見られる。

「佐伯山卯の花持ちし愛しきが子をしとりてば花は散るとも」（万葉集. 1991：122）

しかしここでの「とも」は終助詞のような体を呈しているが、意味的には「その子を手に入れられたら、花は散ってしまっても良い」という仮定の条件を示している。

「別れても身に添ふ影はとまりなむいかなる山の奥に入るとも」（室町. 1999：16）

室町期1520年作の『しぐれ』に登場する姫君の「とも」の用法も終助詞ではなく、「どのような山奥に我が身を潜めたとしても」という仮定条件の接続助詞的用法である。

山田によると終助詞「とも」について、「これは文語の『うれしともうれし』のやうな形の下略から轉成したものであろう」（山田. 1929：200）と述べているように、元々は接続助詞から生じたもののようであるが、江戸期初期の口語文法を中心に記述した『日本大文典』（1604－1608）には、終助詞「とも」の用法が記されている。

「この助辞 Tomo（とも）は直説法の現在、過去、及び未来に接続して別の意味を示す。それは話しことばで盛んに用ゐられるものであつて、強い力を持つてゐる事は実例を見ればわかる。例へば、Attatomo（有つたとも）、yŭtomo（言ふとも）は、葡語の E pois não, que ha que falar nisso？（はい、勿論です、それに就いて何か話すことがありませうか。）等といふのに当り」（日本大文典. 1955：79）

このように接続助詞から終助詞的用法に変容した終助詞「とも」は室町期の文学作品に散見できるが、終助詞として定着したのは江戸期後期からのようである。

3 江戸時代後期の「とも」

前出の『日本大文典』によると、江戸期前期には既に「話しことばで盛んに用ゐられるもの」として「とも」が用いられていたとするが、管見の調べでは室町期から江戸期前期の文学作品には殆ど見られず、江戸期後期の文学作品においても調査対象とした538作品中、「とも」の出現は25作品の42例に止まった[(1)]。

<表1.「とも」が出現する江戸期の作品>

江戸期の作品	話し手	聞き手
1752年. 宝暦 2年「当世下手談義」嘸ゝそふでござろとも	下女	浪人
1770年. 明和 7年「南江駅話」ソウとも	遊廓の客	遊廓の客
1771年. 明和 8年「俠者方言」そうだとも	いさみ	いさみ
1775年. 安永 4年「寸南破良意」のむとも	商人	商人
1775年. 安永 4年「甲駅新話」随分見られるとも	遊客	遊客
1778年. 安永 7年「大通秘密論」あるとも	女郎	遊廓の客
1779年. 安永 8年「鯛の味噌津」いそがしいとも	武家の下男	銭湯の下男
1798年. 寛政10年「温泉の垢」せめて盆前迄と頼むたとも	遊廓亭主	遊廓の客
1800年. 寛政12年「二筋道宵之程」とかくげんきながよいとも	母	嫁
1802年. 享和 2年「東海道中膝栗毛上」そふだろうとも. やろふとも. やるとも	町人. 町人. 町人	町人. 子供. 巫女
そふとも. ありますとも	遊客. 旅籠主人	女郎. 町人
1804年. 享和 4年「曲亭伝奇花釵」さうとも. ヲヽにたとも	武士. 老母	武士. 娘
1806年. 文化 3年「串戯しつこなし」飲もふとも	町人	画師
1806年. 文化 3年「東海道中膝栗毛下」あげませずとも. くひやせうとも	駕籠かき. 町人	町人. 旅人
ひやりましよとも	僧侶	旅籠主人
1809年. 文化 6年「浮世風呂」ヲヽ出るとも. 上げませうとも	父親. 乳母	子供. 子守少女
1809年. 文化 6年「旧観帖」しれるとも. たつしやとも. そうとも. そうだとも	占者. 占者. 旅人. 旅人	婆. 婆. 婆. 旅人
1809年. 文化 6年「巽夢語卒爾屋」きますべへとも	武士	女郎
1811年. 文化 8年「狂言田舎操」参りますとも. いいとも	旅役者. 旅役者	先生. 旅役者
1813年. 文化10年「浮世床」あるともあるとも. 思ひ出すとも.	寺子屋師匠. 隠居	床屋主人. いさみ
あるともあるとも. あるとも. 長いとも長いとも	町人. 町人. 町人	町人. 床屋主人. 町人
1813年. 文化10年「古今百馬鹿」ハイハイ換へますとも	女房	亭主
1820年. 文政 3年「花暦八笑人」来るとも	町人	町人
1836年. 天保 7年「春告鳥」よふざますとも	女郎	女郎
1837年. 天保 8年「志家居名美」あんじてゐるとも	武士	女郎
1841年. 天保12年「春色梅美婦禰」お察し申しますとも. そりやア逢ますとも	唄女. お上さん	唄女. 幇間
1857年. 安政 4年「七偏人」オホホホホホ揺り返しますとも	茶屋の娘	茶屋の客
1865年. 慶応元年「梅屋集」引立るとも	町人	町人

<表2. 江戸期後期調査対象作品>[2]

作品群	浮世草子	笑話	読本	洒落本	黄表紙	滑稽本	人情本	計
作品数	26	21	14	232	141	93	11	538

因みに「とも」が比較的多く出現する19世紀初期の作品「浮世床」(洒落本. 1990:258－369)の終助詞の使用実態を見ると、全終助詞85種、終助詞延べ出現数1,386の内、「とも」の出現率は0.6％であった。

<表3.「浮世床」に出現する終助詞>

終助詞	%（実数）	はな	3.7（51）	はいの	1.7（24）	ものよ	0.9（12）
か	10.9（151）	ね	3.2（45）	ぞ	1.6（22）	かい	0.8（11）
さ	10.4（144）	す	3.0（41）	て	1.6（22）	かね	0.7（10）
よ	10.4（144）	のさ	2.9（40）	は	1.5（21）	つけ	0.7（10）
ぜ	8.7（121）	はい	2.2（30）	ものさ	1.3（18）	と	0.7（10）
の	8.5（118）	や	2.0（28）	はさ	1.1（15）	かえ	0.6（ 9）
な	6.4（ 89）	ものか	1.8（25）	かの	0.9（13）	のよ	0.6（ 9）
						とも	0.6（ 9）

「とも」に続く出現率0.5％以下の終助詞57種
え. かいの. かす. かな. かよ. が. がな. がの. けれど. さね. さの. ぜな. ぜの. ぞい. ぞいやい. ぞえ. ぞや. ぞよ. つけか. つけが. つさ. つて. つてな. てな. てね. とか. とさ. とな. とよ. とよの. ない. なえ. なよ. に. にさ. によ. のか. のかえ. のかね. のさね. のす. のに. ものかえ. ものかな. ものさね. ものす. ものは. ものを. やな. やの. よな. よの. はいやい. はえ. はす. はの. はよ.

<表 4.「とも」の出現時期>

接続形態＼出現時期	1752年	1770年	1780年	1790年	1800年	1810年	1820年	1830年	1840年	1850年	1865年
動詞終止形+とも		○	○		○	○	○	○		○	
動詞+断定・丁寧形助動詞+とも					○	○			○	○	
動詞+断定形助動詞+とも				○	○						
動詞+否定・丁寧形助動詞+とも					○						
動詞+丁寧形助動詞+「べい」+とも						○					
動詞+推量形助動詞+とも					○	○					
動詞+推量・丁寧形助動詞+とも						○	○				
動詞可能形+とも		○				○					
動詞「ござる」+推量形助動詞+とも	○										
副詞+とも		○			○	○	○				
副詞+断定形助動詞+とも		○				○					
副詞+推量形助動詞+とも					○						
形容詞終止形+とも			○		○		○	○			
形容詞+ざます丁寧形助動詞+とも								○			
形容動詞語幹+とも						○					

このように「とも」の使用が江戸期後期に定着されたとしても、その使用頻度は比較的少なかったようであるが、「とも」の出現時期を見ると、「のむとも」といった動詞の終止形に「とも」が下接したものはどの時代にも現れるが、その他の形では凡そ1810年前後に出現時期が集中している。この時期は土屋によると、「冒頭に規定した『江戸共通語』が文化年間には存在したと言ってもよいのではないかと考える」(3)（土屋. 1987：73）と述べているように「江戸共通語」が成立した時期(4)であり、この時期に「とも」の出現が符合しているところから江戸語らしい終助詞の一つに挙げることが出来よう。次にどのような用い方であるのかを「とも」への接続形態及び使用階層(5)、使用性別を見ることにする。25作品42例に対する「とも」の上接部は次のようである。

尚、1例のみしか見られない希なものは割愛する。

用　例	作　品	話し手	聞き手
のむとも	「寸南破良意」p.335.	商人	商人
あるとも	「大通秘密論」p.17.	女郎	客
やるとも	「東海道中膝栗毛（上）」p.214.	町人	巫女
出るとも	「浮世風呂」p.64.	父親	子供
あるとも	「浮世床」p.269.	師匠	床屋
思ひ出すとも	「浮世床」p.277.	隠居	いさみ
あるとも	「浮世床」p.287.	町人	町人
あるとも	「浮世床」p.349.	町人	床屋
来るとも	「花暦八笑人」p.518.	町人	町人
あんじてゐるとも	「志家居名美」p.163.	武士	女郎
引立るとも	「梅屋集」p.276.	町人	町人

［動詞終止形＋とも］

動詞の常体終止形に下接した最も多い形の平叙文である。「とも」の使用を見ると、商人から商人へという対等の関係か、又は武士から女郎へという概ね上から下への使用になっている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
ありますとも	「東海道中膝栗毛（上）」p.305.	主人	町人
参りますとも	「狂言田舎操」p.331.	旅役者	先生
換へますとも	「古今百馬鹿」p.184.	女房	亭主
お察し申しますとも	「春色梅美婦禰」p.599.	唄女	唄女
逢ますとも	「春色梅美婦禰」p.651.	上さん	幇間
掘り返しますとも	「七偏人」p.1012.	茶屋娘	茶屋客

［動詞連用形＋断定・丁寧形助動詞＋とも］

動詞の「ます形」に下接した平叙文である。旅役者に対した聞き手の「先生」は四文の先生と呼ばれるのらつき者だが、知識人であるが故、丁寧な言い方をされているのであろう。

用　例	作　品	話し手	聞き手
頼むたとも	「温泉の垢」p.170.	廓亭主	客
にたとも	「曲亭伝奇花釵」p.161.	老母	娘

[動詞連用形＋断定形助動詞＋とも]

動詞の「た形」に下接した平叙文である。遊廓の亭主は客に対し親愛の情を示す接尾語の「しゆふ」(6)付けで呼んでいる。

用　例	作　品	話し手	聞き手
やろふとも	「東海道中膝栗毛（上）」p.128.	町人	子供
飲もふとも	「串戯しつこなし」p.107.	町人	画師

[動詞未然形＋推量形助動詞＋とも]

町人が道端で子供が捕らえた泥亀を売ってくれと交渉すると、子供が「やろうとも」と応えたものであり、町人と画師とは近所の飲み友達である。ここでは概ね上から下の者へ、又は対等の関係の使用になっている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
くひやせうとも	「東海道中膝栗毛（下）」p.37.	町人	旅人
ひやりましよとも	「東海道中膝栗毛（下）」p.249.	僧侶	主人
上げませうとも	「浮世風呂」p.164.	乳母	少女

[動詞連用形＋推量・丁寧形助動詞＋とも]

少女は「乳母日傘」の娘であり、僧侶は、「うそよごれたひげむしやくしやの大ぼうず壱人いざなひきたりて」という出で立ちにつき、概ね下から上の者への丁寧な言い方に用いられている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
見られるとも	「甲駅新話」p.80.	遊客	遊客
しれるとも	「旧観帖」p.209.	占者	婆

[動詞可能形＋とも]

占者は婆と同じ長屋の住民であり、遊客は遊び仲間であるところから、概ね対等の関係の使用と思われる。

用　例	作　品	話し手	聞き手
ソウとも	「南江駅話」p.76.	客	客
そふとも	「東海道中膝栗毛（上）」p.297.	客	女郎
さうとも	「曲亭伝奇花釵」p.146.	武士	武士
そうとも	「旧観帖」p.284.	旅人	婆

[副詞＋とも]

「だ」の省略された「そう」に下接した平叙文である。肯定の意を表わす「そう」に「とも」が下接した例は他例に比して多く見られる。概ね対等な関係での用い方になっており、話し手は全て男である。

用　例	作　品	話し手	聞き手
そうだとも	「侠者方言」p.210.	いさみ	いさみ
そうだとも	「旧観帖」p.287.	旅人	旅人

[副詞＋断定形助動詞＋とも]

「だ」が省略されずに残っている形の平叙文である。ここでも概ね対等な関係での男の使用になっている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
いそがしいとも	「鯛の味噌津」p.435.	下男	下男
よいとも	「二筋道宵之程」p.146.	母	娘
いいとも	「狂言田舎操」p.336.	役者	役者
長いとも	「浮世床」p.352.	町人	町人

[形容詞終止形＋とも]

形容詞の常体に下接した平叙文である。母から娘への用い方も見られる。

<表 5.「とも」の使用階層及び使用性別>

( ) は実数

上→上	2.4％ (1)
上→中	−
上→下	4.8％ (2)
中→上	−
中→中	38.1％ (16)
中→下	23.8％ (10)
下→上	2.4％ (1)
下→中	19.0％ (8)
下→下	9.5％ (4)
計	100.0％ (42)

女→男	11.9％ (5)
男→女	16.7％ (7)
女→女	11.9％ (5)
男→男	59.5％ (25)
計	100.0％ (42)

＼	話し手	聞き手
女	23.8％ (10)	28.6％ (12)
男	76.2％ (32)	71.4％ (30)
計	100.0％ (42)	100.0％ (42)

話し手	町人 (10). 遊客 (3). 武士 (3). 女郎 (以下 2). 旅人. 旅役者. 占者. 下女 (以下 1). 侠客. 商人. 下男. 遊廓亭主. 母. 旅籠主人. 老母. 駕篭かき. 僧侶. 父親. 乳母. 寺子屋師匠. 隠居. 女房. 唄女. お上さん. 茶屋娘.
聞き手	町人 (7). 遊客 (4). 女郎 (4). 婆 (3). 侠客 (以下 2). 子供. 旅人. 床屋主人. 浪人 (以下 1). 商人. 下男. 嫁. 巫女. 武士. 娘. 画師. 旅籠主人. 子守少女. 先生. 旅役者. 亭主. 唄女. 幇間. 茶屋の客.

※ ( ) の数字は登場回数

次に、「とも」の使用階層[8]及び使用性別についてまとめてみると、庶民から武士までの身分階層を越えた様々な人々が用いているが、中でも町人を始めとした庶民階層を中心として、中層から中層の者へ、又は下層の者への使用が比較的多い。性別では女の使用もあるが、男から男への使用が比較的多い。

<表 6.「とも」への接続形態・出現率>

( ) は実数

「とも」への接続形態	用　例	出現率 (数)	
動詞終止形＋とも	のむとも．あるとも．やるとも 等	26.2 (11)	69.0 (29)
動詞連用形＋丁寧形助動詞＋とも	ありますとも．参りますとも．換へますとも 等	14.3 (6)	
動詞連用形＋断定形助動詞＋とも	頼むたとも．にたとも	4.8 (2)	
動詞連用形＋否定・丁寧形助動詞＋とも	あげませずとも	2.4 (1)	
動詞連用形＋丁寧形助動詞＋「べい」＋とも	きますべへとも	2.4 (1)	
動詞未然形＋推量形助動詞＋とも	やろふとも．飲もふとも	4.8 (2)	
動詞連用形＋推量・丁寧形助動詞＋とも	上げませうとも．くひやせうとも．ひやりましよとも	7.1 (3)	
動詞可能形＋とも	見られるとも．しれるとも	4.8 (2)	
動詞「ござる」＋推量形助動詞＋とも	そふでござろとも	2.4 (1)	
副詞＋とも	ソウとも．そふとも．さうとも 等	9.5 (4)	16.7 (7)
副詞＋断定形助動詞＋とも	そうだとも	4.8 (2)	
副詞＋推量形助動詞＋とも	そふだろうとも	2.4 (1)	
形容詞終止形＋とも	いそがしいとも．よいとも．いいとも 等	9.5 (4)	11.9 (5)
形容詞連用形＋「ざます」丁寧形助動詞＋とも	よふざますとも	2.4 (1)	
形容動詞語幹＋とも	たつしやとも	2.4 (1)	2.4 (1)
計		100% (42例)	

以上、江戸期後期、1810年前後の文化・文政期に現れた庶民文化の発展や、戯作活動の活発化を背景としたところの、江戸語の成立という言語形成期における「とも」の様相を垣間見た。先ず、「とも」の接続形態では42例中、動詞に下接したものが大半を占め、次に「そう・そうだ」系列、形容詞、形容動詞という順であり、動詞表現では「あるとも」、「そう・そうだ」表現では「そうとも」に偏っている。これは「とも」が「勿論」という肯定的な断定の意を表明するものであり、短い会話での聞き手に返答する場合に用いられたからであろう。「そうだ」の場合は「そうだ」の「だ」の持つ強い語感が同階層の男同

士に用いられたようである。又、常体に「とも」が下接した形が多いが、丁寧体に下接したものも少なくない。使用層では武士、女郎、大人、子供など多岐にわたりその幅は広いが、主に庶民の中層、下層の使用が目立ち、上層の使用が少ないのは、上の者への使用が憚られる待遇性を見て取れよう。性別の使用では男から男への使用が多く、女性の使用が少ない。このことから今日の男性専用語化の兆候を、江戸期後期に見ることが出来る。

4　明治時代以降の「とも」

明治期以降の文学作品に見られる終助詞「とも」の出現状況を見ると、明治期から大正期にかけて「とも」の出現が数多く見られるが、次第に昭和期の戦後以降はその衰退傾向が見てとれる。

＜表 7.「とも」が出現する明治期以降の作品＞

明治期以降の作品	話し手	聞き手
1870年．明治 3年「西洋道中膝栗毛」		
そうともそうとも．そうともそうとも	通辞．旅人	旅人．旅人
1876年．明治 9年「春雨文庫」然うでございませうとも	下女	廓の客
1881年．明治14年「天衣紛上野初花」あるとも．ございますとも	悪坊主．茶店婆	札差商人．札差商人
そりやア今夜は助かるとも	札差商人	武士
1884年．明治17年「怪談牡丹燈籠」斬れますとも．やるともさ	武士．侠者（夫）	人妻．侠者の妻
出て往きますとも	侠者の妻	侠者（夫）
1885年．明治18年「当世書生気質」あるとも．来るとも	書生．書生	書生．書生
1887年．明治20年「浮雲」さうとも．宜しいとも	役所の官吏．役所の官吏	元同僚．娘
確に然うとも．言て仕舞ひますとも	役所の官吏．娘	娘の母親．役所の官吏
さう思ひますとも．お立てなさいとも	娘．判任官	役所の官吏．娘
1895年．明治28年「変目伝」出来てるんですとも．本統だとも	店主の従弟．母親	友達関係．息子
さうだらうとも	店主	店主の従弟
1898年．明治31年「くれの廿八日」癒りますとも．行くンだとも	教師．資産家旦那	資産家旦那．教師・愛人
在やアしませんとも	資産家夫人	大店の主人
1901年．明治34年「牛肉と馬鈴薯」さうですとも	会社員	知人関係
1902年．明治35年「富岡先生」さうとも．さうとも	村長．村長	校長．校長
1902年．明治35年「空知川の岸辺」わかりましたとも．さうですとも	旅館の主人．客	客．下級の役人
1902年．明治35年「藁草履」有ますとも	役人	若い農夫
1902年．明治35年「雨」可いとも	18．9の娘	15．6の娘
1903年．明治36年「日の出」さうとも	法学士	新聞記者
1903年．明治36年「馬上の友」なれますとも	15歳の少年	新聞記者
1903年．明治36年「老嬢」変りましたとも	助教論	元教頭
1906年．明治39年「号外」行りましようとも．そうですとも	彫刻家．飲み友達	飲み友達．彫刻家
1907年．明治40年「恋を恋する人」さうですとも．さうですとも	青年．青年	14．5の少女．14．5の少女
憶へて居ますとも	青年	恋仲
1907年．明治40年「少女病」さうとも	文学者	友人
1907年．明治40年「平凡」有りますとも．さうですとも	書生．書生	下宿の娘．下宿の娘
養子なんですとも	下宿屋の姪	書生
1908年．明治41年「三四郎」本当とも	画家	教員
1908年．明治41年「坑夫」さうとも．這入れますとも	茶店かみさん．坑夫	坑夫．坑夫
1908年．明治41年「新世帯」然でございますとも	叔母	酒屋の主人
1909年．明治42年「耽溺」かまひませんとも．お嫁に行きますとも	文学者．芸者	料理屋女将．文学者
さうとも．さうですとも	芸者．文学者	文学者．芸者
さうですとも．なるとも	文学者．客	芸者の母親．芸者
1910年．明治43年「縁」それは変つたとも．さうですとも	作家．作家	21歳の女．21歳の女の兄
出懸けて行つて上げますとも	未亡人	作家
それはあるとも．それはあるともねえ	作家．21歳の女の旦那	芸者．作家
1910年．明治43年「恭三の父」宜いとも	父親	息子
1910年．明治43年「土」そうだともよ．そうだともよ	女房．老母	女房．女房
そうだともさね．要らねえともね．そうだとも	農民の女房．伯母．婆	農民．娘．爺
1911年．明治44年「幇間」一番仕合はせだとも	商店のお上	幇間
1911年．明治44年「泥人形」それはさうですとも．さうですとも	夫人．老婢	大学教授．大学教授
1912年．明治45年「罐曳」出来ますとも	婆のつばめ	婆・財産家
1914年．大正 3年「剃刀」然うですとも．然うでございませうとも	役場書記．床屋の妻	校長．代議士
左様でございませうとも	床屋の妻	代議士
1914年．大正 3年「山椒大夫」そうですとも	母	息子12歳
1919年．大正 8年「或る女」大丈夫危なかありませんとも	19歳の女	軍人・青年
これんばかりも思やしませんとも	19歳の女	軍人・青年
知つてゐますとも．それはさうですとも	19歳の女．青年（恋人）	船の事務長．娘・恋人
知つとるとも．お易い御用ですとも	船の事務長．娘	娘．軍人・青年
1922年．大正11年「ドモスの死」そんなだとも．さうだとも	若き画家．若き画家	若き画家．若き画家
1923年．大正12年「骨」行くとも	青年	貸本屋主人
1925年．大正14年「城のある町にて」ちがひますとも	義兄	姉夫婦の娘

1926年. 大正15年	「磔茂左衛門」さうとも. ぬるとも さうとも. さうとも. さうとも	百姓達. 百姓達	中年の百姓. 百姓総代
1928年. 昭和 3年	「放浪記」行きますとも. いゝとも	百姓達. 百姓達. 百姓	百姓総代. 百姓総代. 百姓
1929年. 昭和 4年	「三月変」綴縹よしだとも	私·女給. 私·女給	カフェ女給. カフェ女給
1932年. 昭和 7年	「薔薇盗人」ほんまとも	母親	息子
1934年. 昭和 9年	「色ざんげ」ほんたうですとも	少年小5	少年（小3）
1934年. 昭和 9年	「鵺」いいとも. いいとも いいとも. さうともし さうとも	洋画家 百姓. 金貸し 旧地主叔母. 旧地主叔母 旧地主叔母	画家妻父親 旧地主叔母. 旧地主 旧地主. 金貸し 金貸し
1936年. 昭和11年	「裸の町」さうだとも. やるとも	旦那·夫婦. 旦那·夫婦	妻·夫婦. 妻·夫婦
1936年. 昭和11年	「いのちの初夜」さうですとも	患者	患者
1937年. 昭和12年	「火山灰地」いいともさ. えいとも	学校の先生. 労務者	娘. 生茎生産者
1937年. 昭和12年	「生活の探求」大丈夫やとも. 大丈夫ですとも	老農民. 農家の主人	老人·知人. 大学生
1938年. 昭和13年	「南方郵信」なるとも	農民	農家の息子
1941年. 昭和16年	「遠方の人」知つてるとも	漁師の少年	元画家
1942年. 昭和17年	「明月記」大丈夫ですとも	病院長	患者の伯母
1946年. 昭和21年	「なよたけ」さうでございますとも	瓜作り山男	武士の息子
1946年. 昭和21年	「晩春日記」いいとも	夫	妻
1946年. 昭和21年	「ヴィヨンの妻」いいとも	同級生	同級生
1947年. 昭和22年	「おはん」したとも	商人の倅	別れた女房
1947年. 昭和22年	「桜の森の満開の下」いいとも	山賊	さらった女房
1947年. 昭和22年	「紅葉明り」ごもつともでございますとも 男ですとも	若い女性 若い役僧	若い医者 若い女性
1949年. 昭和24年	「下町」いゝとも	職人風の男	行商の女
1950年. 昭和25年	「最上川」いいとも	作家·夫	再婚·妻
1952年. 昭和27年	「死んだ海」さようでございましようとも	船方未亡人	船の機関士
1956年. 昭和31年	「光る道」ようがすともよ	若い衛士	帝三女·姫
1958年. 昭和33年	「あすなろ物語」いいとも	酒場の主人	客·少女
1960年. 昭和35年	「澪標」さうだらうとも. さうだとも	夫（夫婦）. 夫（夫婦）	妻（夫婦）. 妻（夫婦）
1960年. 昭和35年	「湯葉」そうとも	商店の主人	商店の主人
1962年. 昭和37年	「幼児狩り」おいしいとも	三歳の男	未婚のOL
1966年. 昭和41年	「沈黙」生きておられるとも	通辞	司祭
1976年. 昭和51年	「最後の喫煙者」そうとも	医者	医者
1985年. 昭和60年	「ぼくらの七日間戦争」ほんとうですとも 聞きますとも	中学生息子の母親 中学の校長	中学の教員 中学生息子の母親
1997年. 平成 9年	「棟居刑事の凶存凶栄」そうでしょうとも	警部	写真家
1999年. 平成11年	「海辺のカフカ（下）」いいとも	青年運転手	初老の男
1999年. 平成11年	「幸福御礼」そうですとも	息子	母親
2000年. 平成12年	「とりあえずの殺人」いいとも. 分ってるとも	警部. 社長	部下·刑事. 秘書
2000年. 平成12年	「オーデュボンの祈り」そうだとも	青年	28歳失業者
2001年. 平成13年	「人質カノン」なりますとも	女性運転手	OL
2001年. 平成13年	「R. P. G.」いいとも	警察署長	警察署課長

＜表 8.「とも」の出現時期＞

接続形態＼出現時期	1870年	1880年	1890年	1900年	1910年	1920年	1930年	1940年	1950年	1960年	1970年	1980年	1990年	2000年
動詞終止形+とも		○○○		○○		○○○	○○	○						○
動詞+丁寧形助動詞+とも		○○	○	○○○○○○○		○○						○		○
動詞+断定形助動詞+とも					○			○						
動詞+断定丁寧形助動詞+とも				○○										
動詞+否定形助動詞+とも					○									
動詞+否定丁寧形助動詞+とも			○		○	○								
動詞+推量丁寧形助動詞+とも				○										
動詞命令形+とも		○												
動詞可能丁寧形+とも		○		○	○									
動詞ござる+丁寧形助動詞+とも		○			○			○○						
動詞ござる+推量形助動詞+とも	○				○				○					
動詞「ございます」の終形+とも									○					
動詞「おる」の敬語形+とも										○				
準体助詞+断定形助動詞+とも			○											
準体助詞+断定丁寧助動詞+とも			○	○		○								
名詞+断定形助動詞+とも							○							
名詞+断定丁寧形助動詞+とも								○						
連体詞+断定形助動詞+とも						○								
副詞+とも	○	○		○○○○○		○	○			○	○			
副詞+断定形助動詞+とも					○	○	○			○				○
副詞+断定丁寧形助動詞+とも			○	○○○○○○○○○			○				○			
副詞+推量形助動詞+とも			○							○				
副詞+推量丁寧形助動詞+とも													○	
形容詞終止形+とも		○		○	○		○	○○	○○○○○	○				○○○
形容動詞終止形+とも			○		○									
形容動詞+断定丁寧助動詞+とも							○○	○				○		
形容動詞語幹+とも				○			○	○						

又、「とも」の複合形態（ともさ・ともさね・ともし・ともね・ともよ）が明治期末以降に出現してくるのも、この時代の一つの特徴である。田中によると、「明治の終わりから

大正期にかけては、明治二十年代・三十年代に芽生えた、東京語の特徴が、発展した時期である」(田中. 1988：10) と述べているように、明治の中期は二葉亭四迷を始めとした言文一致運動の高揚や、学校教育での教科書の文語体から口語体へ変わっていく事情を背景とした、江戸言葉が東京語へ移行する時期である。このような日本語の上に大きな変化のあった時期に「とも」の変容を見ることができる。

次に明治期以降の「とも」の様相について、江戸期後期同様に、接続形態及び使用階層、使用性別を見ることにする。先ず73作品134例の「とも」の上接部を示すが、1例しか見られない希なものは割愛する。

用　例	作　品	話し手	聞き手
あるとも	「天衣紛上野初花」p.99.	坊主	札差商人
助かるとも	「天衣紛上野初花」p.271.	札差商人	武士
やるともさ	「怪談牡丹燈籠」p.328.	侠者の夫	侠者の妻
あるとも	「当世書生気質」p.160.	書生	書生
来るとも	「当世書生気質」p.245.	書生	書生
なるとも	「耽溺」p.335.	料理屋客	芸者
あるとも	「緑」p.333.	作家	芸者
あるともねえ	「緑」p.347.	旦那	作家
知つとるとも	「或る女」p.127.	船事務長	娘
行くとも	「骨」p.299.	青年	商店主
ゐるとも	「磔茂左衛門」p.173.	百姓	百姓総代
やるとも	「裸の町」p.296.	夫	妻
なるとも	「南方郵信」p.348.	農民	青年
知つてるとも	「遠方の人」p.403.	少年	元画家
分っているとも	「とりあえずの殺人」p.212.	社長	秘書

[動詞終止形＋とも]

比較的多く見られる動詞の常体、終止形に下接した平叙文である。使い手を見ると、書生から書生への対等の関係や、少年から大人（元画家）への下から上へ、社長から秘書への上から下への、階層を越えた使い方が見える。「坊主」と「札差商人」(9)は悪党の仲間であり、武士は、札差商人より下の位置にある。

用　例	作　品	話し手	聞き手
出て往きますとも	「怪談牡丹燈籠」p.364.	侠者の妻	夫
言て仕舞ひますとも	「浮雲」p.164.	娘	官吏
思ひますとも	「浮雲」p.166.	娘	官吏
癒りますとも	「くれの廿八日」p.37.	女教師	資産家
有ますとも	「藁草履」p.24.	役人	農夫
憶へて居ますとも	「恋を恋する人」p.358.	青年	娘
有りますとも	「平凡」p.313.	書生	娘
行きますとも	「耽溺」p.314.	芸者	文学者
行つて上げますとも	「緑」p.308.	未亡人	作家
出来ますとも	「罅曳」p.363.	つばめ	女財産家
知つてゐますとも	「或る女」p.68.	娘	船事務長
ちがひますとも	「城のある町にて」p.10.	青年	少女
行きますとも	「放浪記」p.36.	カフェ女給	カフェ女給
聞きますとも	「ぼくらの七日間戦争」p.107.	校長	生徒母親
なりますとも	「人質カノン」p.75.	女運転手	OL客

[動詞連用形＋断定・丁寧形助動詞＋とも]

動詞の「ます形」に下接したものも比較的多く見られる。娘から官吏へという下から上に対するものや、運転手から客への丁寧な用法が見える。

用　例	作　品	話し手	聞き手
変つたとも	「緑」p.162.	作家	娘
したとも	「おはん」p.282.	商人の倅	別れた女房

[動詞連用形＋断定形助動詞＋とも]

動詞の「た形」に下接した平叙文である。ここでは概ね上から下へ、又は対等の関係で用いられている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
わかりましたとも	「空知川の岸辺」p.163.	旅館主人	旅館の客
変りましたとも	「老嬢」p.49.	助教諭	元教頭

［動詞連用形＋過去・丁寧形助動詞＋とも］

動詞の「ます形」の過去に下接した平叙文である。この形は江戸期後期に見られなかったものであり、概ね下から上へ、又は対等の関係で用いられている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
在やアしませんとも	「くれの廿八日」p.48.	夫人	商店主
かまひませんとも	「耽溺」p.308.	文学者	食堂女将
危なかありませんとも	「或る女」p.8.	娘	青年軍人
思やしませんとも	「或る女」p.16.	娘	青年軍人

［動詞連用形＋否定・丁寧形助動詞＋とも］

動詞の丁寧形否定表現に下接した平叙文である。互いに丁寧な言い方であるところから、概ね対等の関係での用い方であろう。

用　例	作　品	話し手	聞き手
斬れますとも	「怪談牡丹燈籠」p.280.	武士	夫人
なれますとも	「馬上の友」p.220.	少年	新聞記者
這入れますとも	「坑夫」p.173.	坑夫	坑夫

［動詞可能・丁寧形助動詞＋とも］

動詞の可能表現に下接したものは、江戸期後期には見られなかったものである。隣家の「源次郎」と密通している「お國」が唆しているように、源次郎はお國より下に位置づけられよう。

「なんぼ貴君が劔術がお下手でも、船頭ぐらゐは斬れませう。」「夫れは斬れますとも。」p.280
源次郎（旗本の息子・武士）→お國（旗本の妾）

用　例	作　品	話し手	聞き手
ございますとも	「天衣紛上野初花」p.218.	茶店婆	札差商人
然でございますとも	「新所帯」p.35.	叔母	商店主
さうでございますとも	「なよたけ」p.27.	山男	武士息子
ごもつともでございますとも	「紅葉明り」p.175.	娘	医師

［動詞「ござる」＋丁寧形助動詞＋とも］

「ある・いる」の意の丁寧語に下接した、江戸期後期に見られなかったものであり、「ござる」で待遇する上下関係で用いられている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
然うでございませうとも	「春雨文庫」p.316.	下女	廓の客
然うでございませうとも	「剃刀」p.150.	床屋お上	代議士
左様でございませうとも	「剃刀」p.151.	床屋お上	代議士
さようでございましようとも	「死んだ海」p.60.	未亡人	船機関士

［動詞「ござる」＋推量形助動詞＋とも］

概ね「ござる」で待遇する上下関係で用いられているが、次の「未亡人」の言葉に待遇性が見えないのは、新蔵の言う「カネ子」が後に新蔵の妻になる21歳の若い女性であり、49歳の未亡人の嫉妬めいた心情が現れている。

「ちがうよ、おらシンは淋しがり屋なんだ。ところがカネ子はとつても明るい女でな。—」「へえへえ、さようでございましようとも。」p.60　お吉（未亡人）→新蔵（機関士）

用　例	作　品	話し手	聞き手
出来てるんですとも	「変目伝」p.83.	見習い商人	商店主
養子なんですとも	「平凡」p.360.	娘	書生
お易い御用ですとも	「或る女」p.178.	娘	青年軍人

[準体助詞＋断定・丁寧形助動詞＋とも]

動詞の連体形に準体助詞が付き、「です」に下接した、江戸期後期に見られなかったものであり、概ね対等の関係での用い方になっている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
そうとも	「西洋道中膝栗毛」p.38.	通辞	旅人
そうとも	「西洋道中膝栗毛」p.103.	旅人	旅人
さうとも	「浮雲」p.124.	官吏	元同僚
然うとも	「浮雲」p.147.	官吏	夫人
さうとも	「富岡先生」p.118.	村長	校長
さうとも	「富岡先生」p.118.	村長	校長
さうとも	「日の出」p.179.	法学士	新聞記者
さうとも	「少女病」p.13.	文学者	友人
さうとも	「坑夫」p.26.	茶店女将	坑夫
さうとも	「耽溺」p.315.	芸者	文学者
さうとも	「磔茂左衛門」p.168.	百姓	百姓
さうとも	「磔茂左衛門」p.173.	百姓	百姓総代
さうとも	「磔茂左衛門」p.177.	百姓	百姓総代
さうとも	「磔茂左衛門」p.189.	百姓	百姓
さうともし	「鵺」p.267.	婆	金貸し
さうとも	「鵺」p.267.	婆	金貸し
そうとも	「湯葉」p.259.	商店主	商店主
そうとも	「最後の喫煙者」p.31.	医師	医師

[副詞＋とも]

肯定の意を表わす「そう」に下接した例は他に比して多く見られる。明治期以降のものでは女の使用も見られ、概ね対等な関係での用い方になっている。一例のみ「さうともし」があるが、これは呼びかけの気持ちを表わす終助詞「し」が連接したもので、稀な用い方である。

「なんだ。さうかえ。そんでは、三ぶは婆さまにも、その事は内証で行つただな。」「ええ、さうともし！それは野郎が、おらに手を合はせて頼んだこつたわし。」p.267　おとり（万三郎の叔母）→伊勢金（金貸し）

用　例	作　品	話し手	聞き手
そうだともよ	「土」p.49.	女房	女房
そうだともよ	「土」p.78.	老母	女房
そうだともさね	「土」p.85.	女房	農夫
そうだとも	「土」p.187.	婆	爺
さうだとも	「ドモスの死」p.311.	画家	画家
さうだとも	「裸の町」p.296.	夫	妻
さうだとも	「濹標」p.151.	夫	妻
そうだとも	「オーデュボンの祈り」p.358.	青年	失業者

[副詞＋断定形助動詞＋とも]

「だ」が省略されずに残っているもので、女の使用も見られ、概ね対等な関係での用い方になっている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
さうですとも	「牛肉と馬鈴薯」p.210.	会社員	友達
さうですとも	「空知川の岸辺」p.170.	旅人	旅人
そうですとも	「号外」p.336.	友達	彫刻家
さうですとも	「恋を恋する人」p.346.	青年	少女
さうですとも	「恋を恋する人」p.347.	青年	少女
さうですとも	「平凡」p.315.	書生	下宿の娘
さうですとも	「耽溺」p.331.	文学者	芸者
さうですとも	「耽溺」p.331.	文学者	芸者母親
さうですとも	「緑」p.251.	作家	青年
さうですとも	「泥人形」p.232.	夫人	大学教授
さうですとも	「泥人形」p.232.	婆	大学教授
然うですとも	「剃刀」p.144.	役場書記	校長
そうですとも	「山椒大夫」p.147.	母親	息子
さうですとも	「或る女」p.80.	青年	娘
さうですとも	「いのちの初夜」p.304.	患者	患者
そうですとも	「幸福御礼」p.41.	息子	母親

[副詞＋断定・丁寧形助動詞＋とも]

「そう」に「です」が付いた平叙文に下接している。この形は江戸期後期に見られなかったものであり、概ね対等な関係での用い方になっている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
さうだらうとも	「変目伝」p.134.	商店主	見習商人
さうだらうとも	「澪標」p.151.	夫	妻

［副詞＋推量形助動詞＋とも］

「そうだ」に推量表現が上接したもので、概ね上から下へ、又は対等の関係で用いられている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
宜しいとも	「浮雲」p.134.	官吏	娘
可いとも	「雨」p.353.	娘	娘
宜いとも	「恭三の父」p.232.	父親	息子
いゝとも	「放浪記」p.43.	カフェ女給	カフェ女給
いいとも	「鵺」p.248.	百姓	婆
いいとも	「鵺」p.262.	金貸し	旧地主
いいとも	「鵺」p.263.	婆	旧地主
いいともさ	「火山灰地」p.185.	教師	娘
えいとも	「火山灰地」p.210.	労務者	農夫
いいとも	「晩春日記」p.465.	夫	妻
いいとも	「ヴィヨンの妻」p.14.	同級生	同級生
いいとも	「桜の森の満開の下」p.316.	山賊	山賊女房
いゝとも	「下町」p.161.	職人風の男	行商の女
いいとも	「最上川」p.209.	作家の夫	作家の妻
いいとも	「あすなろ物語」p.214.	酒場の主人	少女
おいしいとも	「幼児狩り」p.309.	男児	娘
いいとも	「海辺のカフカ（下）」p.390.	運転手	初老の男
いいとも	「とりあえずの殺人」p.72.	警部	刑事
いいとも	「R. P. G.」p.182.	署長	課長

［形容詞終止形＋とも］

形容詞の常体に下接した平叙文である。「とも」への接続形態の中で最も多く見られるものであり、江戸期後期での男の使用が、明治期以降では女の使用も見られ、概ね上から下へ、又は対等の関係で用いられている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
本統だとも	「変目伝」p.89.	母親	息子
仕合はせだとも	「幇間」p.324.	商店お上	幇間

［形容動詞終止形＋とも］

形容動詞の常体に下接した平叙文であり、江戸期後期には見られなかった、概ね対等な関係での用い方になっている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
本当とも	「三四郎」p.470.	画家	教員
ほんまとも	「薔薇盗人」p.345.	少年	少年
大丈夫やとも	「生活の探求」p.109.	農民	老人

［形容動詞連用形＋断定・丁寧形助動詞＋とも］

「です」体の形容動詞文に下接した平叙文である。この形は江戸期後期に見られなかったものであり、互いに丁寧な言い方になっているところから、概ね対等な関係での用い方になっている。

用　例	作　品	話し手	聞き手
ほんたうですとも	「色ざんげ」p.253.	息子	義理父親
大丈夫ですとも	「生活の探求」p.175.	農夫	学生
大丈夫ですとも	「明月記」p.431.	病院長	患者伯母
ほんとうですとも	「ぼくらの七日間戦争」p.101.	生徒母親	教師

［形容動詞語幹＋とも］

形容動詞の常体から「だ」の省略された平叙文に下接していて、概ね対等な関係での用い方になっている。「とも」に上接している「や」は終助詞であり、聞き手に話し手の意思を呼びかけている。

次に、「とも」の使用関係及び使用性別について見ると、一定の資産を持たない庶民階層の中層から中層の人々の使用が比較的多く、性別では女の使用もあるが、男から男への使用が比較的多い。

<表 9.「とも」の使用階層及び使用性別>

( ) は実数

上→上	3.7% (5)
上→中	7.5% (10)
上→下	0.7% (1)
中→上	7.5% (10)
中→中	55.2% (74)
中→下	6.0% (8)
下→上	2.2% (3)
下→中	4.5% (6)
下→下	12.7% (17)
計	100.0% (134)

女→男	12.2% (32)
男→女	14.6% (40)
女→女	12.2% (8)
男→男	61.0% (54)
計	100.0% (134)

＼	話し手	聞き手
女	29.9% (40)	35.8% (48)
男	70.1% (94)	64.2% (86)
計	100.0% (134)	100.0% (134)

話し手	娘 (11). 農民 (9). 旦那 (7). 青年 (6). 官吏 (5). 叔母 (5). 書生 (以下 4). 母親. 少年. 文学者. 画家. 作家. 教師. 女房. 婆 (以下 3). 警官. 通辞 (以下 2). 店主. 夫人. 村長. 客. 未亡人. 女給. 医者. 芸者. 旅人 (以下 1). 下女. 坊主. 茶屋婆. 札差商人. 武士. 侠者. 判任官. 店主弟. 資産家. 会社員. 旅館主人. 法学士. 彫刻家. 飲み友達. 茶店女将. 坑夫. 父親. 商店女将. つばめ. 船舶事務長. 義兄. 金貸し. 患者. 労務者. 山男. 同級生. 商人の倅. 山賊. 役僧. 職人風. 衛士. 酒場主人. 校長. 運転手. 息子. 社長. 女運転手.
聞き手	娘 (13). 女房 (11). 農民 (8). 母親 (4). 息子 (4). 書生 (以下 3). 官吏. 友達. 教師. 校長. 少女. 芸者. 青年. 爺. 軍人. 旅人. 店主 (以下 2). 客. 札差商人. 資産家. 新聞記者. 坑夫. 文学者. 作家. 教授. 代議士. 少年. 画家. 女給. 旧地主. 金貸し. 医者. ＯＬ. 警官. 武士 (以下 1). 侠者. 元同僚. 店主弟. 元教頭. 飲み友達. 彫刻家. 酒屋主人. 料理屋女将. 幇間. 婆. 船舶事務長. 貸本屋主人. 父親. 叔母. 患者. 大学生. 元画家. 伯母. 武士の息子. 同級生. 別れた女房. 行商の女. 船の機関士. 姫. 司祭. 写真家. 秘書. 失業者.

※ ( ) の数字は登場回数

<表 10.「とも」への接続形態・出現率>

( ) は実数

「とも」への接続形態	用例	出現率 (数)	
動詞終止形+とも	あるとも. 助かるとも. やるともさ 等	11.2 (15)	40.3 (54)
動詞連用形+丁寧形助動詞+とも	思ひますとも. 癒りますとも. 有ますとも 等	11.2 (15)	
動詞連用形+断定形助動詞+とも	変つたとも. したとも	1.5 (2)	
動詞連用形+断定·丁寧形助動詞+とも	わかりましたとも. 変りましたとも	1.5 (2)	
動詞連用形+否定形助動詞+とも	要らねえともね	0.7 (1)	
動詞連用形+否定·丁寧形助動詞+とも	在やアしませんとも. かまひませんとも 等	2.9 (4)	
動詞連用形+推量·丁寧形助動詞+とも	行りましようとも	0.7 (1)	
動詞命令形+とも	お立てなさいとも	0.7 (1)	
動詞可能·丁寧形+とも	斬れますとも. なれますとも. 逼入れますとも	2.2 (3)	
動詞「ござる」+丁寧形助動詞+とも	ござりますとも. 然でございますとも 等	2.9 (4)	
動詞「ござる」+推量形助動詞+とも	然うでございませうとも 等	2.9 (4)	
動詞「ございます」の訛形+とも	ようがすともよ	0.7 (1)	
動詞「おる」の敬語形+とも	生きておられるとも	0.7 (1)	
準体助詞+断定形助動詞+とも	行くンだとも	0.7 (1)	2.9 (4)
準体助詞+断定·丁寧形助動詞+とも	出来てるんですとも. 養子なんですとも 等	2.2 (3)	
名詞+断定形助動詞+とも	緻緹よしだとも	0.7 (1)	1.5 (2)
名詞+断定·丁寧形助動詞+とも	男ですとも	0.7 (1)	
連体詞+断定形助動詞+とも	そんなだとも	0.7 (1)	0.7 (1)
副詞+とも	そうとも. さうとも. 然うとも	13.4 (18)	33.6 (45)
副詞+断定形助動詞+とも	そうだとも. さうだとも. そうだともよ	5.9 (8)	
副詞+断定·丁寧形助動詞+とも	さうですとも. そうですとも. 然うですとも	11.9 (16)	
副詞+推量形助動詞+とも	さうだらうとも	1.5 (2)	
副詞+推量·丁寧形助動詞+とも	そうでしょうとも	0.7 (1)	
形容詞終止形+とも	宜しいとも. 可いとも. いいとも 等	14.2 (19)	14.2 (19)
形容動詞終止形+とも	本統だとも. 仕合はせだとも	1.5 (2)	6.7 (9)
形容動詞連用形+断定·丁寧形助動詞+とも	大丈夫ですとも. ほんたうですとも 等	2.9 (4)	
形容動詞語幹+とも	本当とも. ほんまとも. 大丈夫やとも	2.2 (3)	
計		100% (134例)	

以上、明治期以降の「とも」は明治期から大正期にかけた東京語の発展期に顕著に出現したが、接続形態では134例中、「ある・やる・なる」の動詞及び「そう・そうだ」の副詞表現に下接したものが7割以上を占め、終助詞の複合形が見られることによって、話者の表現意図が加わるようになった。又、常体に「とも」が下接した形が多いものの、丁寧体に下接したものも少なくなく、「とも」の使用層では庶民の中層及び下層の使用で9割を超し、使用性別では男から男へ、男から女への使用が比較的多いが、女性の使用も少なくない。

5 まとめ

江戸時代後期から明治時代以降の現代までの終助詞「とも」の用い方について、通時的にその様相をみたところ、次の点が明らかになった。

接続形態では江戸期後期の15から明治期以降は27に拡大した。特に江戸期後期は比較的動詞文への下接が多かったが、明治期以降は動詞文が後退し、副詞文や形容詞文が増え、名詞文や丁寧形への下接も目立つようになった。又、江戸期後期には「とも」に下接する複合形終助詞の形態が見られなかったが、明治期以降には「さ・さね・し・ね・よ」の五

＜表11. 江戸時代後期から現代までの「とも」への接続形態・出現率＞

「とも」への接続形態	江戸時代後期出現率（数）		明治時代以降の出現率（数）	
動詞終止形＋とも	26.2（11）	69.0（29）	11.2（15）	40.3（54）
動詞連用形＋丁寧形助動詞＋とも	14.3（6）		11.2（15）	
動詞連用形＋断定形助動詞＋とも	4.8（2）		1.5（2）	
動詞連用形＋断定・丁寧形助動詞＋とも	—		1.5（2）	
動詞連用形＋否定形助動詞＋とも	—		0.7（1）	
動詞連用形＋否定・丁寧形助動詞＋とも	2.4（1）		2.9（4）	
動詞連用形＋丁寧形助動詞＋「べい」＋とも	2.4（1）		—	
動詞未然形＋推量形助動詞＋とも	4.8（2）		—	
動詞連用形＋推量・丁寧形助動詞＋とも	7.1（3）		0.7（1）	
動詞命令形＋とも	—		0.7（1）	
動詞可能形＋とも	4.8（2）		—	
動詞可能・丁寧形＋とも	—		2.2（3）	
動詞「ござる」＋丁寧形助動詞＋とも	—		2.9（4）	
動詞「ござる」＋推量形助動詞＋とも	2.4（1）		2.9（4）	
動詞「ございます」の訛形＋とも	—		0.7（1）	
動詞「おる」の敬語形＋とも	—		0.7（1）	
準体助詞＋断定形助動詞＋とも	—		0.7（1）	2.9（4）
準体助詞＋断定・丁寧形助動詞＋とも	—		2.2（3）	
名詞＋断定形助動詞＋とも	—		0.7（1）	1.5（2）
名詞＋断定・丁寧形助動詞＋とも	—		0.7（1）	
連体詞＋断定形助動詞＋とも	—		0.7（1）	0.7（1）
副詞＋とも	9.5（4）	16.7（7）	13.4（18）	33.6（45）
副詞＋断定形助動詞＋とも	4.8（2）		5.9（8）	
副詞＋断定・丁寧形助動詞＋とも	—		11.9（16）	
副詞＋推量形助動詞＋とも	2.4（1）		1.5（2）	
副詞＋推量・丁寧形助動詞＋とも	—		0.7（1）	
形容詞終止形＋とも	9.5（4）	11.9（5）	14.2（19）	14.2（19）
形容詞連用形＋「ざます」丁寧形助動詞＋とも	2.4（1）		—	
形容動詞終止形＋とも	—	2.4（1）	1.5（2）	6.7（9）
形容動詞連用形＋断定・丁寧形助動詞＋とも	—		2.9（4）	
形容動詞語幹＋とも	2.4（1）		2.2（3）	
計	100%（42例）		100%（134例）	

つの形が見えた。「とも」の意味では、江戸期後期から明治期以降を通して大きな意味的変化は見られなかったが、「とも」の複合形終助詞が見られることによって、話者の表現意図が加わるようになった。使用階層では、江戸期後期では町人階層の中層及び下層の使用が主であったが、明治期以降では主に庶民階層の中層に偏っているものの、使用層の広がりが見えた。又、江戸期後期に比して女性の使用や男から女への使用が若干増えてきた。「とも」使用の出現時期では、そのピークが江戸期の化政期及び明治期中期から大正期に見られるように、「とも」がその時代の一定の社会的変動の中で用いられてきたようである。

＜表 12. 江戸時代後期から現代までの「とも」の出現時期＞

接続形態＼出現時期	1752年	1770年	1790年	1810年	1830年	1850年	1870年	1890年	1910年	1930年	1950年	1970年	1990年	2000年
動詞終止形+とも	○○	○○○	○	○	○	○○○	○○○○○○○				○			
動詞+丁寧助動詞+とも			○○○		○○		○○○○○○○○				○	○		
動詞+断定助動詞+とも			○○				○		○					
動詞+断定丁寧助動詞+とも							○							
動詞+否定助動詞+とも							○							
動詞+否定丁寧助動詞+とも			○			○○	○							
動詞+丁寧助動詞+べい+とも			○											
動詞+推量助動詞+とも			○○											
動詞+推量丁寧助動詞+とも			○○					○						
動詞命令形+とも								○						
動詞可能形+とも		○		○										
動詞可能・丁寧形+とも							○	○○						
動詞ござる+丁寧助動詞+とも							○	○		○				
動詞ござる+推量助動詞+とも	○					○		○		○				
動詞「ございます」の略形+とも											○			
動詞「おる」の敬語形+とも										○				
準体助詞+断定形助動詞+とも								○						
準体助詞+断定丁寧助動詞+とも							○○	○						
名詞+断定助動詞+とも									○					
名詞+断定丁寧助動詞+とも										○				
連体詞+断定助動詞+とも									○					
副詞+とも		○	○○○			○	○○○	○○		○	○			
副詞+断定助動詞+とも		○	○				○	○	○	○		○		
副詞+断定丁寧助動詞+とも								○○○○○		○			○	
副詞+推量助動詞+とも			○				○			○				
副詞+推量丁寧助動詞+とも												○		
形容詞終止形+とも		○○	○○				○○	○	○	○○○○○		○	○○	
形容詞+ざます丁寧助動詞+とも					○									
形容動詞終止形+とも							○	○						
形容動詞+断定丁寧助動詞+とも									○○○		○			
形容動詞語幹+とも			○					○	○○					

注

(1) 実際は44例であるが、「あるともあるとも」等の繰り返し箇所は一例として扱った。

(2) 出典は＜参考文献＞の箇所に示した。

(3) 「冒頭に規定した」との意味は、身分、階層、性別を超えて使用され、江戸市中のみならず、全国的にも通用した口語語の存在を指している。

(4) 成立時期については、「十九世紀はじめの文化文政期を待たなければならない」(松村. 1957：7)、「明和以降拡大し、化政あたりで一つの頂点をきわめる」(小松. 1985：6) という説がある。

(5) 「とも」の話し手及び聞き手の階層分けは、平木 (2000)「江戸人階層表作成試案－『辰巳之園』に見られる登場人物から－」に掲載された階層表 (p.198) による。

(6) 「ヤア金しゆふ貴公のでつちにおれか羽織も持たせてくれたか」(「温泉の垢」p.170)

(7) 平木 (1998)「江戸語資料に見られる文末詞『べい』の待遇性」において、使い手の階層分析に「田舎侍」(p.30) が記されている。又、遊郭での侍は、「何者によらず馬乗物、鐺・長刀門内へ停止たるべきものなり」(喜田川. 1999：323)。侍は帯刀が許されず、町人風を装っていたようである。

(8) 江戸文学作品の登場人物は主に庶民階層だが、武士の出現は黄表紙の「文武二道万石通」や「敵討義女英」、読本の「繁野話」や「催馬楽奇談」などに見られる。

(9)「やがて、この札差が直参武士相手の高利貸しになって、武士たちをスッテンテンにするようになる」(石川. 2005：56) という件から、札差商人から俸禄米を金銭に換える貧しい武士の姿が窺える。

＜参考文献＞

＜語学＞

岩井良雄 (1974)『日本語法史江戸時代編』笠間書院. p.334.

国立国語研究所 (1951)『現代語の助詞・助動詞』秀英出版. p.125.

此島正午 (1973)『国語助詞の研究』桜楓社. p.401.

小松寿雄 (1985)『江戸時代の国語江戸語』東京堂出版. p.6.

ジョアン・ロドリゲス (1955・復刻版)『日本大文典』(土井忠生訳) 三省堂. p.79.

田中章夫 (2001)『近代日本語の文法と表現』明治書院. p.217.

土屋信一 (1987)「江戸共通語をめぐって」『香川大学国文研究 12』香川大学国文学会. p.73.

中野伸彦 (1998)「江戸語の終助詞・上接部の種類の整理 (二)」『研究論叢第 48 巻第 1 部－人文科学・社会科学－』山口大学教育学部. pp.16-17.

西田直敏 (1967)「終助詞－助詞のすべて」『国文学解釈と教材の研究 2 月号』学燈社. pp.171-172.

平木孝典 (1998)「江戸語資料に見られる文末詞『べい』の待遇性」『日語日文学研究第 32 輯』韓国日語日文学会. p.30.

平木孝典 (2000)「江戸人階層表作成試案－『辰巳之園』に見られる登場人物から－」『日語日文学研究第 36 輯』韓国日語日文学会. p.198.

松村明 (1957)『江戸語東京語の研究』東京堂. p.7.

山田孝雄 (1929)『日本口語法講義』寶文館. p.200.

湯沢幸吉郎 (1954)『江戸言葉の研究』明治書院. p.677.

＜文化・辞書・文学作品＞

石川英輔 (2005)『大江戸生活事情』講談社. p.56.

喜田川守貞 (1999・復刻版)『近世風俗志 (三)』(宇佐美英機校訂) 岩波書店. p.323.

「狂言集上」(1968)『日本古典文学体系 42』岩波書店. p.219.

「洒落本 滑稽本 人情本」(1990)『日本古典文学全集 47』小学館. pp.258-369.

「室町物語集下」(1999)『新日本古典文学体系 55』岩波書店. p.16.

『万葉集全訳注』(1991) 講談社. p.122.

＜調査対象作品＞

＜江戸時代の文学作品＞

「異素六帖．古今俄選．粋宇瑠璃．田舎芝居」（1998）『新日本古典文学体系 82』岩波書店．「田舎荘子．当世下手談義．当世穴さがし」（1990）『新日本古典文学体系 81』岩波書店．「浮世草子集」（1928）『日本名著全集第九巻』日本名著全集刊行会．「浮世風呂」（1982）『日本古典文学体系 63』岩波書店．「浮世風呂．戯場粋言幕の内．大千世界楽屋探」（1989）『新日本古典文学体系 86』岩波書店．『江戸時代文芸資料第一』（1916）国書刊行会．「江戸笑話集」（1966）『日本古典文学体系 100』岩波書店．「江戸の戯作絵本（一）」（1980）『現代教養文庫』社会思想社．「江戸の戯作絵本（二）」（1981）『現代教養文庫』社会思想社．「江戸の戯作絵本（三）」（1982）『現代教養文庫』社会思想社．「江戸の戯作絵本（四）」（1983）『現代教養文庫』社会思想社．「江戸の戯作絵本続巻（一）」（1984）『現代教養文庫』社会思想社．「江戸の戯作絵本続巻（二）」（1985）『現代教養文庫』社会思想社．『黄表紙傑作集』（1926）三星社．「黄表紙．洒落本集」（1965）『日本古典文学体系 59』岩波書店．「黄表紙川柳狂歌」（1988）『日本古典文学全集 46』小学館．『近世文芸叢書第六』（1911）国書刊行会．『近世文芸叢書第十』（1911）国書刊行会．『近代日本文学大系第十一巻』（1927）国民図書．『近代日本文学大系第二十二巻』（1928）国民図書．「けいせい色三味線．けいせい伝受紙子．世間娘気質」（1989）『新日本古典文学体系 78』岩波書店．『元禄期軽口本集近世笑話集（上）』（1987）岩波書店．『滑稽文学全集第四巻』（1918）文芸書院．「滑稽本集」（1927）『日本名著全集第十四巻』日本名著全集刊行会．「滑稽本集［一］」『叢書江戸文庫 19』（1990）国書刊行会．『山東京伝全集第二巻』（1993）ぺりかん社．「洒落本集」（1929）『日本名著全集第十二巻』日本名著全集刊行会．『洒落本集成第二十一巻』（1929）春陽堂．『洒落本大系第十巻』（1931）六合館．『洒落本大系第十一巻』（1931）六合館．『洒落本大系第十二巻』（1929）林平書店．『洒落本大成第二巻』（1978）中央公論社．『洒落本大成第三巻』（1979）中央公論社．『洒落本大成第四巻』（1979）中央公論社．『洒落本大成第五巻』（1979）中央公論社．『洒落本大成第六巻』（1979）中央公論社．『洒落本大成第八巻』（1980）中央公論社．『洒落本大成第九巻』（1980）中央公論社．『洒落本大成第十巻』（1980）中央公論社．『洒落本大成第十二巻』（1981）中央公論社．『洒落本大成第十五巻』（1982）中央公論社．『洒落本大成第十六巻』（1982）中央公論社．『洒落本大成第十七巻』（1982）中央公論社．『洒落本大成第十八巻』（1983）中央公論社．『洒落本大成第十九巻』（1983）中央公論社．『洒落本大成第二十巻』（1983）中央公論社．『洒落本大成第二十三巻』（1985）中央公論社．『洒落本大成第二十四巻』（1985）中央公論社．『洒落本大成第二十五巻』（1986）中央公論社．『洒落本大成第二十六巻』（1986）中央公論社．『洒落本大成第二十七巻』（1987）中央公論社．『洒落本大成第二十八巻』（1987）中央公論社．『洒落本大成第二十九巻』（1988）中央公論社．『洒落本大成補巻』（1988）中央公論社．「洒落本滑稽本人情本」（1990）『日本古典文学全集 47』小学館．「式亭三馬集」（1992）『叢書江戸文庫 20』国書刊行会．「繁野話．催馬楽奇談．曲亭伝奇花釵児鳥辺山調錢」（1992）『新日本古典文学体系 80』岩波書店．「十辺舎一九集」（1997）『叢書江戸文庫 43』国書刊行会．「春色梅児誉美」（1967）『日本古典文学体系 64』岩波書店．「醒酔笑」（1992）『東洋文庫 31』平凡社．「説経集」（1977）『新潮日本古典集成（第八回）』新潮社．『東海道中膝栗毛（上）』（1973）岩波書店．『東海道中膝栗毛（下）』（1973）岩波書店．『徳川文芸類聚第五』（1914）国書刊行会．「人情本集」（1928）『日本名著全集第十五巻』日本名著全集刊行会．「人情本集」『叢書江戸文庫 36』（1995）国書刊行会．「八文字屋集」『叢書江戸文庫 8』（1988）国書刊行会．『噺本大系第五巻』（1975）東京堂出版．『噺本大系第六巻』（1976）東京堂出版．『噺本大系第九巻』（1979）東京堂出版．『噺本大系第十一巻』（1979）東京堂出版．『噺本大系第十六巻』（1979）東京堂出版．『噺本大系第十八巻』（1979）東京堂出版．「都の錦集」『叢書江戸文庫 6』（1989）国書刊行会．「米饅頭始．仕懸文庫．昔話稲妻表紙」（1990）『新日本古典文学体系 85』岩波書店．「読本集」（1927）『日本名著全集第十三巻』日本名著全集刊行会．

＜明治時代以降の作品＞

「明治開化期文学集」（1966）『明治文学全集 1』筑摩書房．「長塚節鈴木三重吉中勘助」（1969）『日本の文学 16』中央公論社．「尾崎一雄外村繁上林暁」（1969）『日本の文学 52』中央公論社．「ぼくらの七日間戦争」（1993）『角川文庫』角川書店．「有島武雄集」（2000）『現代日本文学大系 35』筑摩書房．「村山知義真船豊久保栄三好十郎集」（2000）『現代日本文学大系 58』筑摩書房．「梶井基次郎外村繁中島敦集」（2000）『現代日本文学大系 63』筑摩書房．「林芙美子宇野千代幸田文集」（2000）『現代日本文学大系 69』筑摩書房．「武田麟太郎織田作之助島木健作壇一雄集」（2000）『現代日本文学大系 70』筑摩書房．「太宰治坂口安吾集」（2000）『現代日本文学大系 77』筑摩書房．「現代名作集（一）」（2000）『現代日本文学大系 91』筑摩書房．「現代名作集（二）」（2000）『現代日本文学大系 92』筑摩書房．「二葉亭四迷」（2000）『明治の文学 5』筑摩書房．「坪内逍遙」（2001）『明治の文学 4』筑摩書房．「広津柳浪」（2001）『明治の文学 7』筑摩書房．「山田美妙」（2001）『明治の文学 10』筑摩書房．「内田魯庵」（2001）『明治の文学 11』筑摩書房．「国木田独歩」（2001）『明治の文学 22』筑摩書房．「田山花袋」（2001）『明治の文学 23』筑摩書房．「近松秋江岩野泡鳴正宗白鳥」（2001）『明治の文学 24』筑摩書房．「永井荷風谷崎潤一郎」（2001）『明治の文学 25』筑摩書房．「人質カノン」（2001）『文春文庫』文藝春秋．「R. P. G」（2001）『集英社文庫』集英社．「河竹黙阿弥」（2002）『明治の文学 2』筑摩書房．「徳田秋声」（2002）『明治の文学 9』筑摩書房．「島崎藤村北村透谷」（2002）『明治の文学 16』筑摩書房．（2002）『漱石全集 5』岩波書店．「とりあえずの殺人」（2003）『光文社文庫』光文社．「山椒大夫・高瀬舟」（2004）『新潮文庫』新潮社．「沈黙」（2004）『新潮文庫』新潮社．「最後の喫煙者」（2005）『新潮文庫』新潮社．「オーデュボンの祈り」（2005）『新潮文庫』新潮社．「海辺のカフカ（下）」（2005）『新潮文庫』新潮社．「あすなろ物語」（2006）『新潮文庫』新潮社．「棟居刑事の凶存凶栄」（2006）『徳間文庫』徳間書店．「ヴィヨンの妻」（2009）『新潮文庫』新潮社．

A Diachronic Study on a Sentence-Final Particle, **tomo** — From the Late Edo Period to Modern Times —

Takanori HIRAKI
Division of International Center
Kurashiki University of science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received October 1, 2012)

A sentence-final particle of Modern Japanese, or **tomo** (とも) had originated in the Muromachi period. The particle has almost similar meaning to "of course" and expresses the strong assertive judgment. The word **tomo** tended to be used only by males. The common language of today has been formed since the late Edo period on. During this period, female speakers used this word in the same meaning as male speakers did. From the view point of expression of politeness, we can point out that this word is difficult to say to a superior. I analyzed **tomo** final particle from two viewpoints. The first is the viewpoint of gender difference. The Second is the viewpoint of phase difference that can be seen in interpersonal relationships. In order to consider a changing process of **tomo** usage to the present, this paper analyzed a total of 42 examples from 25 literary works during the late Edo Period as well as 134 examples from 73 literary works since the Meiji Era.

We find that **tomo** had 15 kinds of connection forms in the late Edo Period and that numbers had increased to 27 in the Meiji period. In the late Edo period, **tomo** was often connected to the end of the verb sentence. Since the Meiji era, this connection form has decreased while connection to adverb sentence and adjective sentence has increased. During the same period, connection to the end of noun sentence or polite form has increased than before as well.

Significant changes in meaning were not seen from the late Edo period to the Meiji period. From a newly formed compound final particle that is connectable to **tomo**, we feel speaker's intention more clearly. In the late Edo period, the main speakers were middle/low class merchants and craftsmen. Since the Meiji era, speakers too much concentrated on the middle-level common people, but the number of speakers increased. The peak of **tomo** form was seen during the Kasei period (1804-1829) of Edo Era as well as in the mid-Meiji and Taisho periods. We can say that **tomo** appears to be have been used accordingly in certain social changes of the era.